



オルタナティブ 人間論

田坂広志

人類の知に求められる 「7つの成熟」

「人類の文明は、これから、どのような成熟を遂げていくのか」

その問いを掲げ、これまで「オルタナティブ文明論」と題して連載を行ってきた。しかし、この問いを深く問うならば、我々は、必ず、もう一つの問いに向き合うことになる。

「そのとき、人間の精神は、どのような成熟を遂げていくのか」

そこで、これからの連載においては、「オルタナティブ人間論」と題し、そのビジョンを語っていきこう。

では、そもそも、「人間の精神の成熟」とは、何か。

その一つの意味は、「知の在り方」が変わることであり、それを「知の成熟」と呼ぶこともできる。

では、これから、我々の「知の在り方」は、どう変わっていくのか。どう変わっていかなければならないのか。どのように成熟を遂げていかなければならないのか。

そのことを、これからの連載において「人類の知 7つの成熟」として述べていきこう。そして、この第1回では、まず、その全体像を示しておこう。

まず、第1は、「言語の知」から「暗黙の知」への成熟。これからの高度情報革命の時代には、「言葉で表せる知識を用いる能力」ではなく、むしろ、「言葉で表せない智恵を用いる能力」を高めていかなければならない。

第2は、「分析の知」から「統合の知」への成熟。これからの知識社会においては、「専門分野の知識と智恵を獲得する能力」だけでなく、「異分野の知識と智恵を統合する能力」を身につけてい

かなければならない。

第3は、「個人の知」から「集合の知」への成熟。ネット革命の時代、「個人の知識や智恵を生かす能力」に加え、「集団の知識や智恵を引き出す能力」が重要になっていく。

第4は、「管理の知」から「創発の知」への成熟。複雑系の社会では、「既に世の中に存在する知識や智恵を活用する能力」だけでなく、「未だ世の中に存在しない知識や智恵の創発を促す能力」が求められるようになる。

第5は、「理論の知」から「行動の知」への成熟。これからの変革の時代には、「理論としての知識や智恵を語る能力」だけでなく、「その知識や智恵を用いて行動を生み出す能力」こそが大切になっていく。

第6は、「理性の知」から「感性の知」への成熟。直観が求められる時代には、「理性を使って考える能力」よりも、むしろ「感性を使って感じる能力」が重要になっていく。

そして、第7は、「知能の知」から「知性の知」への成熟。人類の前に解決困難な諸問題が山積する時代、「問題に正確な答えを出す能力」よりも、「答えの無い問いを問う能力」こそが大切な能力となっていく。

次回から、それぞれの意味を述べていきこう。

たさか・ひろし 81年、東京大学大学院修了。工学博士。87年、米国バテル記念研究所客員研究員。90年、日本総合研究所の設立に参画。取締役・創発戦略センター所長等を歴任。00年、多摩大学大学院教授に就任。同年シンクタンク・ソフィアバンクを設立。03年、社会起業家フォーラムを設立。08年、世界経済フォーラム(ダボス会議)のGlobal Agenda Councilのメンバーに就任。著書に「未来を予見する5つの法則」など60冊余。



Illustration : Hattaro Shinano